



実践記録を書いてみよう!!

Aさん テーマ:「イブトロジーカプセル」についての実践記録

学習形態: メーカー Web seminar

学習内容: 演題/「ROS1融合遺伝子陽性肺がんの新たな選択肢ーイブトロジーの臨床データを読み解くー」

演者/近畿大学医学部 内科学教室腫瘍内科部門 教授 林 秀敏 先生

この研修のまとめ:

国内で承認されている ROS1-TKI

- ・クリゾチニブ(ザーコリ)
2017年5月
1回250mgを1日2回
- ・エヌトレクチニブ(ロズリートレク)
2020年2月
1日1回600mg
- ・レボトレクチニブ(オータイロ)
2024年9月
1回160mgを1日1回14日間、
その後1回160mgを1日2回
- ・タレトレクチニブ(イブトロジー)
2025年9月
1回600mgを空腹時

ROS1-TKIによる治療の課題

- ・中枢神経系の病変の制御
- ・1次治療の選択肢の不確実性

ROS1-TKIのコンパニオン診断

- ・Amoy 全てOK
- ・オンコマイン クリゾチニブ(ザーコリ)、
エヌトレクチニブ(ロズリートレク)は
OK

イブトロジー

- ・主な副作用として肝機能異常、消化器毒性(嘔気・下痢・食欲不振)、QT延長など
- ・構造上TRK阻害を回避することで回転性めまいなど中心神経症状を軽減
- ・ROS1融合遺伝子陽性非小細胞肺がんも進行期であっても5年以上の生存を目標にできる時代に

実践活用が出来そうな例・学習が実践活用出来た内容

ROS1-TKI症例は少ないが、今後は薬剤毎の特徴も踏まえた処方提案や薬剤管理指導を心掛けたい。

Bさん テーマ：糖尿病に関する研修プログラムについての実践記録

学習形態：日本薬剤師会研修プラットフォーム

学習内容：演題／糖尿病に関する研修プログラム
演者／佐竹正子先生 篠原久仁子先生、小林庸子先生、

この研修のまとめ：

患者に寄り添った薬物療法支援と薬剤師

患者の心理心情に配慮した支援が重要
スティグマ払拭

糖尿病患者インタビューのポイント

2 型糖尿病

低血糖症状に対する質問の仕方の注意点
継続管理のてびき、薬剤管理サマリを用いた薬
薬連携により薬の情報提供や処方提案が可能と
なる

トレーシングレポートを活用した副作用兆候の
情報提供や服薬状況に関する情報提供が重要

1 型糖尿病

入院によるインスリン導入では病院から薬局へ
の薬剤管理サマリを用いた情報提供で退院後の
外来移行時も問題点が明らかとなりやすい、そ
れにより問題点がトレーシングレポートにより
医師へフィードバックされ処方が適正化されて
いく

妊娠糖尿病

患者心理、妊婦特有の不安に対しての配慮が重
要、その内容を薬剤サマリーやトレーシングレ
ポートで共有することが重要

シックデイ対応ルール

保温、安静

水分補給

消化の良いものを摂取

糖尿病薬の調節

改善ない場合受診

特にシックデイ時の糖尿病薬の調節量を医師に
確認しておくことが重要(シックデイカード活
用も可能)

実践活用が出来るような例・学習が実践活用出来
た内容

改正薬機法でフォローアップが義務付けられ、
糖尿病では特に患者の心理まで含めての継続的
なフォローアップが重要である、特に入院した
場合には病院との情報連携、外来や在宅では本
研修でのツールも活用しトレーシングレポート
による情報フィードバックを行ない、薬物療法
の質を上げていきたい

Aさんの実践記録は、新薬(イブトロジー、オータイロ)を含むROS1-TKIの用法・用量が整理されており、特に「空腹時服用」や「段階的な増量」などの情報やイブトロジーと既存薬との構造的な違いやメリットを明確に記載できています。また、コンパニオン診断(Amoyやオンコマイン)の適応範囲まで網羅されており、薬剤師が業務を行う上で必要な周辺知識が整理されていると思います。

このように、セミナーを受講することで得られた客観的な情報については、しっかりとポイントを抑えて記載できていますので、ぜひ実践に活かしていただきたいです。そのために、「処方提案や指導を心掛けたい」という表現に留まらず、例えば「イブトロジーは空腹時服用であるため、患者の生活リズムを確認し、アドヒアランスが維持できる服用タイミングを提案する」や、「副作用の肝機能異常やQT延長に対し、初期段階でのモニタリング項目(血液検査値や自覚症状)を薬歴に記載し、継続的に確認する」など、具体的なアクションに踏み込んでみるとより良いですね。

Bさんの実践記録は、1型、2型、妊娠糖尿病と、それぞれの特性に合わせた支援のポイント(低血糖への聞き取り、不安への配慮など)が明確に区別されて記載されている点がわかりやすいと思います。また、シックデイ対応の面では、「安静」「水分補給」といった治療の基本から、「事前に調節量を医師に確認しておく」という薬剤師が取るべきアクションまで網羅されており、今後の実践に生かすことを意識した記述ができていていると思います。

今回の学習を、学習のままで終わらず、今後につなげていくためには、例えば「患者の心理まで含めた継続的なフォローアップ」について、具体的にどのような言葉を選んで対応をするのかまで考えて記載しておくといいでしょう。また、トレーシングレポートについても、例えば、「単に服薬状況を報告するだけでなく、研修で学んだ『低血糖症状の有無(特に無自覚性低血糖の兆候)』や『シックデイ時の自己調節の理解度』を盛り込んだトレーシングレポートを作成し、医師へフィードバックする」のように具体化しておく、すぐに実践できそうですね。

(北海道科学大学薬学部 教授 山下 美妃)